

氏名	マ 定 延	ジョン ヨン
学位の種類	博士（映像メディア学）	
学位記番号	博映第3号	
学位授与年月日	平成23年3月25日	
学位論文等題目	〈論文〉日本におけるメディアアートの形成と発展—その背景を前景として	

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授	(映像研究科)	藤幡正樹
(副査)	〃	〃	(〃)	桂英史
(〃)	〃	〃	(〃)	岡本美津子
(〃)	東京大学大学院	〃		吉見俊哉
(〃)	武蔵野美術大学	准教授		クリストフ・シャルル

(論文内容の要旨)

本論文は戦後日本社会にて形成発展してきたメディアアートをその対象とする。ここでメディアアートとは、単なる道具ではなく、作家と作品と観客を取り組む環境としてのテクノロジーの発達に伴う「社会現象であり、それに対するアーティストの取り組み方の問題」として定義される。この開かれた定義は、日本におけるメディアアートという対象を、近現代アートの中という狭い文脈から解放し、日本の現代史の中に明確に位置づける。また、同時に個別の実践の軌跡にも重視する意図も反映されている。

戦後科学技術史との密接な関係の中で、1970年大阪万国博覧会を前後とする芸術の動向から本論の議論は始まる。言葉としてのメディアアートが、様々な用語の混乱の中、他の言葉と共に使われ始めた1980年代に関しては、特にアートにおけるコンピュータの意味に注目する一方で、背後にあった日本の高度消費社会の影響について語る。そして以前時代を継承しながら、21世紀の情報社会の到来を予見させる象徴的芸術として囑望されたメディアアートが様々な社会要素と相互作用しながら形成、発展していく1990年代の拡張を考察し、2000年代への影響をも指摘する。

一般的に「前景」として個別の作家、作品があって、その「背景」を成すことが時代象となっているが、ここではその「前景と背景を倒置させてみる」ことを試みている。もともとは一つだったものが分離され、やがて再結合するというアートとテクノロジーの幸福な構図で一般化できない、見落とされている重要な現実的側面をも重視しながら実際起こったことの積み重ね、それらをめぐる記録と記憶を編み直すことによって、自然に浮かび上がる何かが見えてくるのではないかという期待しているのである。

結論として、戦後日本社会の軌跡とともにアートとテクノロジーの動きに介在していた「進歩」の概念を検討し、メディアアートとは何かという問いかけについて答えを探ることで、世界との「同時代性」を可能にした一つの「共通言語」としてのメディアアートの可能性を模索する。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、近年の日本のメディアアートの特殊性に注目し、60年代から現代までの文献調査から、関係者へのインタビューを行い、メディアアート作品出現の背景を見事なまでに活写した、いわば地域芸術の社会学的研究である。

最新の芸術分野を扱う従来型芸術研究の多くが、作家や作品を歴史的な出現順序に並べるだけの作家

論や作品論に陥るケースが多く、新たな芸術論の創成に至っていないケースが多い。そのような落とし穴に陥ることを避けるために、著者はそれらの作品出現の背景となる時代背景、当時の現象や社会構造を丹念な文献調査によって積み上げ、おおよそ70年代の国と作家の関係、80年代の企業と作家、90年代を大学等の教育組織と作家の関係といった時代図式を設定し研究を行った。また、当事者である作家、キュレーター、ジャーナリスト、プロデューサー等に対して、独自のインタビューを行い、新たな事実を追加検証しながら、緻密な一次資料を作成した。

研究対象として、「アートとテクノロジーの融合」という一見幸福な構図では、メディアアートは解釈しきれないとし、アメリカ主導で進められてきた日本の戦後社会における科学技術の発達が、日本のメディアアートの土壌を作り出していることを指摘し、メディアアートと国や企業との関係について特別に注目し研究を行った。

研究手法として、メディアアートが、批評とアートマーケットという「現代アートの」システムから排除されているという立場から、メディアアートを新しいアートの潮流やジャンルとして考え、既存の美術史の手法を使うことが有効でないとし、メディアアートとは、環境化した技術メディアの発達にともなう社会現象であり、それに対するアーティストの取り組みと考える立場から、これを現代史的なパースペクティブから扱っている。

しかしながら、前景となる個々の作家や作品と背景となる時代や現象は、複雑な相互作用を成しており、背景だけを描くことは不可能であるが、収集した資料をもとにして、できるかぎり事実を積み上げることで、それらに関係性の糸を貼り直すことで時代の流れの中にある現象を描き出すことに、みごとに成功している。

著者は、こうした背景を徹底的に描くことで、最終的にそこに浮かんでくる空白部分が、メディアアートの本質なのではないかという問いかけを行っている。本研究は、これまでも、書かれなくてはならなかったにも関わらず、これまで日本の研究者によってさえ書かれることの無かった、日本のメディアアートの形成を明かした極めて重要な論文と言わざるを得ない。著者は博士（映像デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。